

## 圏外のアンテナ

[野立て看板]の巻

5月の連休は長野に行った。帰京の日、関越道に乗ってすぐ、はるか前方の嵐山PA付近で、ダンプカーにワゴン車が追突、上り車線が通行止めになっているという情報が入ってきた。

助手席に乗っていたわたしは、ナビの出番！とばかりに、つつい張り切る。

ツイッター情報をためつすがめつ、スマホの地図を逆さまにひっくり返しながらかえた。関越道の下道（したみち）も、きっと渋滞しているだろう。だったら、距離にして1.5倍ほど、迂回する事にはなるが、高崎から北関東道を抜け、岩舟から東北道に乗って都内に入るルートはどうだろう？

想像以上の大事故になり、通行止めも約6時間続いた。結果的に、この選択は正しかったようである。

そんなアクシデントの一方、北関東道、鬼怒川を超えた栃木県佐野市辺りで、思わず涙腺が決壊してしまうような出来事があった。

ふいに、左前方、緑の山並みの中腹に、「酒は大七」の文字列が、白く浮き出すように姿を現したのである。最近、福島でも、とんと出会わなくなった看板であった。

懐かしくないはずがない。

福島の子どもは皆同じかもしれないが、わたしが最初に読めるようになった漢字も、「酒」と、「大」と、「七」であった。阿武隈高地の山肌に、何度も、何度も、現れるこの文字を、東北本線の車窓から、福島交通のバスの窓から、仰ぎ見ながら育ったのだ。

東京に出ても「福島ってさ、山という山に、大文字焼きみたいな看板、立ってるでしょ？」と、何度か、何人かから、聞かれたっけ。

美しい野立て看板は、ロサンゼルスのリバー山に立つ「HOLLY WOOD」の白文字サインにも似て…。

それは思い出という樽（たる）の蓋（ふた）であり、開けると、中から香り立つ名酒があふれ出す。故郷の記憶への、奇跡のシフトレバーなのだった。

=2016年5月17日掲載=



突然出現した、心の原風景